View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Kwansei Gakuin University Repository

イーディス・ホートン『汚れなき時代』について

永井　衷

一九二五年六月八日、パリに在った Edith Wharton (1862-1937) は、*The Great Gatsby* (1925) を贈った F. S. Fitzgerald (1896-1940) に宛て、称讃の辞を述べた短かい書簡をしたためている。もとよりこれは、いわば一種の儀礼的な祝辞に過ぎぬ手紙ではあるが、既に六〇才を過ぎて老熟の境にあったホートン婆さんと、ヂャズ・エイジの象徴ともいえる若いフィッツジェラルドの対比は、それ自体極めてユーモラスである。そしてその手紙の冒頭に、次のような甚だ印象的な一節がみられる。

I am touched at your sending me a copy, for I feel that to your generation, which has taken such a flying leap into the future, I must represent the literary equivalent of tufted furniture & gas chandeliers.(1)

自分を「ふさ附き家具」や「花ガス灯」にたとえる諧謔の中にも、彼女の文学が現代のアメリカ文学の中で占める位置が察知されるのであるが、後述するような彼女の特殊な文学的キャリアーから考えて、この新進作家の抬頭には彼女自身無量の感慨をもよおしたことであろう。事実その題材の上からも、手法の上からも、既に彼女の文学は当時

明らかに過去のものであったと云えよう。而しこの二人の作家は、表面上は新旧両極端な対立を示しながらも、両者の関心が夫々の特殊な時代につながっている点で、その著しいコントラストの中にも却って一つの共通性をそなえているのは甚だ興味深いことである。

フィッツジェラルドは一九二〇年から三〇年代にかけて、いわゆるヂャズ時代を代表する作家として、*This Side of Paradise* (1920), *The Beautiful and Damned* (1922), *All the Sad Young Man* (1926) 等の一連の初期の作品の中に、この特殊な時代に生きる青年男女のふき奔放な生活を描いたことは周知の通りである。これらの作品は、当時の若い世代がいかに大胆に彼等の先輩達の信奉して来た既成のモラルに反逆したかを克明に描き出す。Amory Blaine の大学生活を例証するまでもなく、それは *Victorianism* に対するあくことなき挑戦であったといえる。他方ホートンの場合は如何であろうか。二〇冊をこえる彼女の作品の中で、その代表作として最も一般に親しまれているのは、*Ethan Frome* (1911) であろう。ここには因襲の色濃きニュー・イングランドの寒村を背景として、貧しい樵夫が妻とその従妹をめぐって繰りひろげる不倫の恋と、彼等の暗い生涯が語られている。因襲に背き、それからのがれようと悪戦苦闘しながらも所詮のがれおおせることなく破滅していく者の運命は、彼女の作品の殆んど大部分の中にみられる一つの重要なテーマであるといえよう。そしてこの作品と同系列におかれるものに *Summer* (1917) があるが、これ等は彼女の作品全体から考えて、その作風の上では異色のものであるといわねばならぬ。ホートンの文学の特色を最もよく示しているのは、むしろ古いニュー・ヨークの上流社会を中心とした一連の作品であり、そこにこそこの作家の本領があったといわねばならない。そしてこのような点で重視されねばならないものに、*The House of Mirth* (1905), *The Custom of the House* (1913), *The Age of Innocence* (1920) があげられる。最初の作品に於ては、名門の出身である美貌の女性が、ニュー・ヨークの社交界で富と地位を兼ねそなえた結婚を望みながらも、却

てその野望故に敗北し、遂には健康を害して悲惨な死を遂げる。第二の作品では、最初の heroin とは逆に、西部からニュー・ヨークの社交界入りをした無教養な成金娘が、男から男へ転々と離婚を重ねながら最後は欧州へまで流れていく生活を描いている。最後の *The Age of Innocence* は、上述した二つの作品と同傾向の作風が感じられるが、これ等の中では最もポピュラーであり、又注目すべき作品であるといえる。(因みにこの作品は一九二一年度のピューリッツア賞を受けている)この物語の背景も、主として一八七〇年代のはじめのニュー・ヨークの上流社会となっているが、それは作者ホートン自身の成人した時代であり、社会であった。従って、ここでホートンの『汚れなき時代』を考えてみたいと思う所以は、一九世紀末の古いニュー・ヨークの姿を回顧してみることが、先にもあげたヂャズ・エイジの文学の姿を一層明瞭にしてくれるように思われるからに外ならない。従って以下この小論に於て述べようとするのは、ホートンの文学の全般的特色についてではなく、彼女がこの作品の中に描き出す前世紀末のニュー・ヨークの上流社会であり、歴史的な変動期にあった特殊な時代相を彼女がいかに眺め、又感じとったかという点にあることをあらかじめ断っておかねばならない。

先ず順序として物語の梗概を考えてみよう。

この作品は登場する人物の数も多く、連続しておこる小さな事件が次から次と書き記されているので、作品の量の上ではかなり重厚な感じを受けるのであるが、物語の本筋を語るのにはさして骨は折れない。主人公 Newland Archer は、古いニュー・ヨークの門閥の跡をつぐ青年であり、弁護士として街の法律事務所に勤務している。May Welland はこのような主人公とは許婚の間柄であり、物語の発端当時二人は結婚式を挙げる日を待っている。そして彼女もこの地の社交界の一方の重鎮である Manson Mingott 家の一員であるが、折しも彼女の従姉で当時ポーランドの伯爵の下へ嫁していた Ellen Olenska が不身持な夫に失望して突如帰国してこの若い婚約者達の前へ姿を現わす

ことになつた。而もエレンはニューランドとは幼馴染の間柄であつたから、彼はこの社会的にも冷たい眼差で迎えられたエレンに対して「この人を護り助けてやろう」と決意するようになる。併しこのような同情は多くの場合単なる同情の域を脱して更に複雑な思いに変つて行くものであるが、この二人の場合も例外たり得ず、やがてぬき差しならぬ三角関係に沈んで行くことになる。一方メイが深窓に育つた気ままな娘の常として、結婚をためらつている中に、彼の心はすつかりエレンの方へかたむいてしまつていた。併しメイが結婚に応じたので、二人は急拠式を挙げ、エレンは、ワシントンに移り住むことになつた。けれどもニューランドの彼女への気持は益々深まつて行きエレンは再びニュー・ヨークへ帰つてくることになる。ここでも彼女はニューランドの執拗な求愛を受けることになるが、既にメイが妊娠している事実を知らされた以上、それは不可能なことであつた。「彼の妻にはなれないのだから、彼の情婦になつて彼と同棲すればいい」[2]とは賢明な彼女にはどうしても考えられないことであつた。やがて彼女は意を決して独りパリへ渡ることになるが、この物語には更に一つの後日談がつくことによつて、この事件を結んでいる。

物語の最後には豊かな教養を身につけながらもその性格に積極性の欠ける老ディレッタントのニューランドが息子のダラスと共にパリに遊び、そこでエレンを訪問しようとするシーンがある。既にメイは亡く、彼は今尚この古い恋人にほのかな思慕の情を寄せながらも、却て彼女に逢うことなく、彼女の温かい幻に生きようとするのである。

以上がこの物語の概略であるが、この作品の興味は、ニューランドとオレンスカ伯夫人との極めて古風で、上品な恋のいきさつもさることながら、寧ろ彼等の生きた当時のニュー・ヨークの上流社会にあることは先にもふれた通りである。由来ホートンの作品には、アイロニカルな社会批評家としてかなり痛烈な風刺がしばしばみうけられるが、ここでもそれが作品を豊かに肉づけているといえる。次に我々はしばらくこの作品の背景となつた時代を、作者の説明と共に回顧してみながら、その時代のもつ意味を考えてみたい。

主人公が青年期を過したのは一八七〇年代のはじめであり、ニュー・ヨークの街には Brougham や、Brown Coupé が走り、未だ電灯はなく、ガス灯がともされていた。作者の説明にまつまでもなく、当時ペンシルベニア鉄道はヂャー・ジー・シティどまりで、人々はいつかはハドソン河の河底にトンネルが掘られ、列車は直接ニュー・ヨークに乗り入れるだろうと考えた。又大西洋を五日で横断出来る汽船や、飛行機や、無線電話のことを夢みたのどかな時代であつた。この物語のいくつかのシーンは、あの古いアメリカを扱つた映画の、素朴で牧歌的な建物や人々の服装を思い出させてくれる。けれども他方、我々が常識的に漠然と考える、諸事に大らかで、デモクラティックであつた筈の古いアメリカの姿は、ここでは全く影をひそめている。少くとも当時の上流社会を支配していたものは、封建的な因襲であり、時代と場所を問わずに存在するこの種の階級にみられる極端な排他主義であつたことに気づく。富有で怠惰な当時の上流人士が、いかに虚飾にみちた生活を送つていたかは、この物語の冒頭に描かれているオペラ劇場のシーン、或は続り返して描かれるパーティーの模様にも充分しのぶことができよう。このような当時のニュー・ヨークの社会を作者は次のように説明している。

「ニューランド・アーチャーの時代のニュー・ヨークは殆んど一つの割れ目もなく、足がかりが得られないすべすべして滑る小さなピラミッドのようであつた。その基底にあたる部分は、アーチャー夫人がいつているような平民であり、彼等は支配階級の人と結婚することによつて、僅かに自分達の生活を高めてきたのであつた」(3)

而も彼等は「本質的には異なつた二つのグループに大別される」のであるが、一方はパーティー好きで、食事や衣裳や金銭のことのみ考えるマンスン家とその一族であり、他方には旅行、園芸、読書といつた高尚な趣味をもつアーチャー家のような一派があつた。この俗物派の代表的人物は、主人公の許婚者（当時）であつたメイの祖母にあたる Old Mrs. Mingott であり、Julius Beaufort であつた。そしてこの傲岸な老ミンゴット夫人も、もとをただせば

「ステートン島の名もなきキャザリン・スパイサー嬢」に過ぎず、その父親は公金を横領して行方をくらました不名誉を担つていた。にもかかわらず、富豪の夫ミンゴット氏の下に嫁し、その死後は持前の老獪さで、その莫大な財産を自己の手中に収めて、セントラル・パークの近くに広大な邸を構えてニュー・ヨークの社交界を睥睨するに至つたのである。ボーフォートもまた、がむしやらで厚顔な点では彼女に劣らぬ醜悪な過去をもつ紳士の一人であつた。かつて自分が勤務した英国の国際銀行からしめ出されながらも、彼にはニュー・ヨークの社交界の嘲笑などものの数ではなかつた。平然と自らの道を進み、やがては「ニュー・ヨーク全体を自分の応接間にひき入れることに成功した」のである。作者はこの種の当時の新しく抬頭しつつあつた新興階級と、彼等に共通する卑俗ないやらしさに対して、繰り返し痛烈な罵倒を浴びせている。そして、このような現象は単にニュー・ヨークの社交界にのみ限らず、南北戦争という歴史的な変動を経て、更に動揺の止まぬ世紀末の躍動するアメリカ全土にみられた傾向でもあつた。この新興階級の勃興に依つて、従来ニュー・ヨークやボストンを中心とした東部の文化的伝統は著しい変容をみせることになつた。この変動が純粋な東部の貴族的文化の中に生きる者に与えた影響は、主人公の次のような慨歎の中にも充分うかがい知ることができる。

「文化！　そうだ文化があつたら！　併し文化的な地方はほんの二、三に過ぎず、而もそれらは文化的向上を目指す努力と他文化との交流の欠如に依つて気息延々としているのだ。それは先祖達がたずさえてきたヨーロッパ文化の最後の遺物なのだ、教養人なんて哀れな小数派に過ぎぬのだ。中心も競争相手も聴衆もないのだ」（大意）

Culture! Yes——if we had it! But there are just a few little local patches, dying out here and there for lack of—well, hoeing and cross-fertilising; the last remnants of the old European tradition that your forebears brought with them. But you're in a pitiful little minority; you've got no centre, no

competition, no audience.[4]

ここにいみじくも Mark Twain によつて命名された 'Gilded Age' の出現がみられるのであるが、この時代を契機として、アメリカが急激に金権万能の社会へ移行して行くのは史実に明らかなところである。政治も経済も堕落の様相をおび、低俗な成金趣味が社会に蔓延して、文字通り「鍍金時代」の出現をみることになるわけである。

「清潔な白ワイシャツをきて、ニュー・ヨークで地方や国家政治に乗り出す危険を冒した少数の紳士の暗い運命は誰しも知つていた。その種のことが可能な時代は過ぎ去つた。地方は、ボス共や移住者達の支配下にあつたし、上品な人間はスポーツや教養に後退しなければならなかつた[5]」

経済界もまた政界と同様で、「古いニュー・ヨークの財界では廉潔は当然の権利——*noblesse oblige* であつた」がそのような美風は地をはらつてしまつた。そこでは、人々は一層実利的になつてくると共に、目的のためには手段をえらばぬ巧智にたけた人間が、突如社会の上層に浮び上つてくる機会が多くなつてくる。この種の人間は老ミンゴット夫人やボーフォートばかりではない。「無数の闇取引によつて靴墨で巨万の富を築き上げた」Lemuel Struthre なども一方の雄ということができよう。このような時代に金融関係や法律家の活動の機会が多くなるが、それはボーフォートの銀行破産事件にもよく表れている。我々の主人公ニューランドとエレンは、このような腐敗と堕落の様相色濃き当時のニュー・ヨーク社交界にあつて、よき古き時代の伝統と良識を身につけた少数の人々を代表する人物であるらしい。従つてこの二人の恋が、悲劇としての意味をもつとするならば、それは当然このような過渡的な混乱を内包していた当時の社会的環境と個人のコンフリクトの中に求められねばならぬ。少くともアイロニカルな響きをもつこの小説のタイトルも、このことを暗示しているが、主人公が身につけた 'genteel tradition' がこのような俗悪な社会の中でいかに変質して行つたかというのが、この物語の主題をなしているように思われる。

アーチャーの母親の時代には、文学や芸術が非常に尊敬されたが、彼自身も、かつては画家、詩人、小説家、科学者がすぐれた俳優をも加えて、公爵同様に尊敬された時代があったことを知っていた。そして幼少の頃から「しばしばメリメやサッカレーやブラウニングが談笑している客間に出入りしたらどんなにかたのしいだろう」[6]と空想してみることがあったし、又「日頃自分がイタリア美術に通じていることを誇りに思って」[7]もいた。我々の主人公も、いわば文学青年の一人に属するわけであり、それ故に、知的であるが故に性格的な弱点をもつ我々の主人公が、このような当時の社会的環境に応じうる筈がない。而も虚栄と作為の女性（若き日の）メイとの気の進まぬ結婚は、彼を更に孤独にしたであろうし、不倫と知りつつ尚エレンに寄せた愛は純粋なものであった。先に、エレンが結婚出来ないとしたら、アーチャーの情婦になるのかとなじる一節をみてきたが、あの後には次のような一節が続いている。

「僕は――僕はとにかくそんな言葉が、そんな分類の仕方が存在しない世界へ逃げて行きたいんです。そこでは互に愛し合う二人っきりになれるでしょうし、愛する相手が生活の全てになるでしょう」[8]

我々がこのアーチャーの愛の告白を考えてみたい所以はこの言葉の内容よりも、俗悪で封建的な当時の上流社会にあっては、所詮彼は一人のハムレットでしかなかったことを言いたいからに外ならない。而も彼は「僕達の結婚や離婚に関する考えは殊の外に古風で、法律上離婚は認められていても、社会的慣習はそれを許さない」ことを熟知していた。それは彼にとって至上の掟であり、彼のような人間にとって、この厚く厳重な社会的因襲の壁を突破することは不可能であった。そして作者はここに、彼の性格的弱さ、行動性の欠如を指摘したり、一つの破滅的な恋についてその悲劇性を強調しようとするよりは、これを過去の時代の恋愛の一つのタイプ――汚れなき時代のほほえましい男女の愛の一例として提示したと云うべきであろう。この小説の最終の章には、既に五七才になった主人公が、静かに自らの歩んできた過去を回想し、今は既に成年に達した息子ダラスと若き日の自分を対比して、無量の感慨をもよお

すことになるからである。

偶々、メトロポリタン博物館の新館落成式から帰ったアーチャー氏は机に向って腰を下すが、そこで昔エレンと密会したことがしのばれ、彼女の幻は更に様々な連想と結びついて行く。今は亡き妻が二十幾年かの昔「新時代の女性ならそれを聞いて微笑するかも知れないような、くどくどと遠まわしな表現で子供ができたことを突然彼に知らせた」[9]のはこの部屋であった事を思いだす。今では「彼の生活は充実していたし」同時にまた「善良な市民」であった。けれども、三〇年に近い歳月は、彼の心身の上にのみでなく、その周囲のものことごとくを一変せしめていたことに対し、彼は今更の如くにおどろかないではいられなかった（彼の二人の子供達は既に成年に達しており、その一人は既に婚約していた）彼がふと目にした娘の Mary Chiverse の肖像さえ、この時代の流れを如実に示していた。

「彼女は母に似て長身で美しかったが、流行の変革が要求する通りに、ウェイストは大きく、胸はうすくて少し前傾していた。メアリー・シヴァースのすばらしい運動の早業をもってしても、メイ・アーチャーの空色の飾り帯でゆっくりはかれる二一吋の胴廻りには及ばなかった。そしてこの差異は象徴的であるかのように思われた[10]」

確かにこの母娘の肖像にうかがわれる外観の差異は象徴的であったといえるが、時代の流れは更に人間内部の生活意識の基盤にも影響してくることになる。アーチャーがこのように考えていた矢先、シカゴからの長距離電話で彼は息子から呼びだされる。建築の仕事をしているダラスが、仕事のことで欧州に行くから、遊山のつもりで同行しないかというのである。而も帰国早々、Fanny Beaufort と結婚したいと云って更に彼をおどろかす。而もこのファニイこそは、かっていまわしい銀行破産事件をひきおこしてアメリカを去ったボーフォートの娘に外ならない。その娘が十八才で再びニュー・ヨークの社交界へ現れて、今ではダラスと相愛の間柄になっているのも皮肉である。彼は今更のように「こんな調子に万事が進んでいくと、僕達の子供がボーフォートの私生児と結婚するようなことになりかね

ないね[11]」と洩らした友人の言葉を思い出した。

けれども三〇年前のエレン・オレンスカの場合に対比されるこのファニィの出現は、今では社交界から好奇と排他的な眼差しを浴びせられることはなかった。才色兼備の彼女に対して、半ば忘れられたその父親の過去や彼女自身の素性など洗いたてる狭量な心の持主はいなかった。たしかに「世界が歩んだ旅路の道程をかくも明らかにするものはなかった」わけである。三〇年の歳月は、米国民の生活に一大変革をもたらした。文化的に経済的に、或は政治や科学工業の面に長足の、殆んど信じられない位の進歩をもたらしたが、このことは同時に社会風俗の上にも敏感に感受されている。我々はこれをピューリタニズムの衰退やアメリカの家庭生活の変容（例えば家族結合の弛緩や、親の権威の縮少乃至は離婚率の増加）や婦人の社会的、政治的な解放という面にもみることができよう。新旧両時代の対立ということは、ホートンの作品の主要テーマの一つであるが、物語の最後のアーチャー父子の対比は、この間の消息を一そう明らかにしてくれる。The Age of Innocence は父親が前半生を過した時代の謂であるが、（もっともこの innocence という言葉の中に同時に作者のアイロニーを否定することはできぬが）それはまた息子ダラスの The Age of Sophistcation に対立するものである。そして作者はこれを最後にアーチャー父子の恋愛観を中心としたユーモラスな対話の中に見事に浮彫りにしながらこの物語を結んでいる。

ホテルの窓からパリの街並を眺めながらふと彼は青年時代のような胸のときめきをおぼえた。そしてファニイ・ボーフォートの前に出た時の息子もこのような胸さわぎをおぼえるだろうと思ってみる。婚約を吾げた時の冷静で、家族の同意は当然のことと考えていた彼の態度を想い出しながら、事実的で、行動的な新らしい時代の青年を考える。

「その相違は、これ等の若者は自分達のしたいことは何だってするのは当然だと考えていることであり、自分達はいつでも、してはならないと思っていたのだ。ただ不思議に思うのは、彼等がそれを前もって不思議に思わな

いことである。これでは、彼らの心臓の鼓動を自分の場合同様に激しくするわけはないではないか[12]」而もその息子のダラスはまるで友人の古い恋愛を揶揄するかのように、エレンとのことで父親に無遠慮な質問を浴びせるのである。そして答に窮して赤面する父親に対して勝ち誇ったかのように、彼女に連絡してあるから是非訪ねるようにすすめるのであった。彼は結局エレンに逢わなかったが、彼にあってはその方が自然であったからであろう。そして、このような父親の内心の動揺を意に解することなく、ヴェルサイユの話をまくしたてる息子に耳を傾けながらも世代の相違を痛感するばかりだった。「彼等は自分の行く道を知っているのだ」と思う。けれども又彼等は、「あらゆる境界標と共に、標識や危険信号まで押し流してしまった新時代のスポークスマンである[13]」とも考えるのであった。も早ニューランド・アーチャーの'Innocence'の時代は過ぎ去って、アメリカはいつしか機械時代（マシン・エイヂ）に突入していた。そして因襲に叛きはしたがこれに屈服したニューランドも、敢然と因襲に挑戦し続けたエレン・オレンスカも、三〇年を経た今では共にわびしくはあるが平和な晩年を迎えたわけである。彼等をあれ程苦しめた、古めかしいニュー・ヨークの上流社会の因襲も、も早何の意味をもつものではなかったし、作者はこの事実を皮肉な筆運びの中にも結論しているわけである。そして最後にホートン自身、このような当時のアメリカの文化や社会に対してどのような立場をとったかという点にふれねばならぬが、それは彼女自身の特殊な経歴とも深い関係をもつものである。彼女が Henry James (1843—1916) の後継者であるというみ方は一つの常識になっているが、この二人の間にはその作風、境遇の上でも著しい類似点がみうけられる。名門の出身であるという点や、教育の点からばかりでなく、彼女も結婚後はパリに渡り、そこで生涯の大半を過しているからである。そしてヂェイムズの場合と同様いわば一人のコズモポリタンとしてアメリカの上流社会を中心とした作品を書いたわけである。けれども前者の場合は、たとえば Daisy Miller (1879) にみられるように、その主題は、ヨーロッパの伝統的文化の前では、所詮粗野で田舎者に過ぎ

ないアメリカ人の悲劇を彼一流の心理主義的リアリズムで追求していったわけである。そしてこの場合彼の批評意識は常にヨーロッパの側に甘かったのは当然の結果であろうが、ホートンの場合も、彼女のヨーロッパ文化に対する尊敬が、卑俗な自国文化に対する拒否の態度となって現われているのはこの作品の中にも明らかである。しかし彼女のそのような批評精神は型式的な道徳的批評の類ではなく、間接的な併し、辛辣なアイロニーとなって、当時のニュー・ヨークの上流階級の生活を写真の様に微細に描き出しながらも、随所に皮肉な観察となってあらわれている。恐らくこの作品程、正確に当時のニュー・ヨークの上流社会の模様を後代に伝える作品はないであろう。その意味で常に古くして新らしい興味を我々に提供してくれる作品の一つであるといえる。

はじめに断ったように、我々は今『汚れなき時代』のもつ意味を主として社会風俗史的な見地から考えてきた。併しホートンは決して風俗史家ではないし(たとえ彼女の作品がその要素を併せもっていたとしても)、アメリカ文学史上に於てはその技巧の上で一方の雄であるといえる。彼女の作品は何よりも文芸作品として接することが必要であるのはいうまでもない。ただこの作品は時代風俗史的にそれ以上の興味をもっているように思われたからに外ならない。而もそのことごとくが、彼女自身の経験の中から生れたものである点、一層我々の興味をひくのである。ニュー・ヨークは州都であるからオペラ劇場へ早くからつめかけることは、当を得たことではなかったとか、「適当であるか否か」という問題が、当時のニュー・ヨークに於ては「まるで数千年の昔の彼等の祖先の運命を支配した神秘なトーテム」に似ていたという類の説明が随所にみられる。フィッツジェラルドがその作品の中で「ヴィクトリア朝の母親達は自分の娘達がどんなに不用意にいつも接吻されていたか思いもよらぬことだった[14]」と述べているが、この書物は、その母親達がどのような世界に育って来たかを如実に我々に知らせてくれているわけでもある。

(一九五八年一一月)

註1. *The Crack-Up*, edited by Edmund Wilson, New Directions. N. Y. 1945, p. 309.
2. *The Age of Innocence* (The Modern Library) p. 292.
3. *ibid* p. 46.
4. *ibid* p. 124.
5. *ibid* pp. 123-4.
6. *ibid* p. 101.
7. *ibid* p. 68.
8. *ibid* p. 293.
9. *ibid* p. 347.
10. *ibid* pp. 351-2.
11. *ibid* p. 355.
12。*ibid* pp. 356-7.
13. *ibid* p. 156.
14. *This Side of Paradise* by F. S, Fitzgerald, Charles Scribner's Sons, N. Y. 1951, p.52.

——関西学院大学文学部助教授——